

カント×敗北×尊厳破壊

- ♡喘ぎ、濁点喘ぎ
- 敗北、モブ姦、拘束
- 輪姦、二穴攻め
- 部下からレイプ
- 尊厳破壊
- 快樂墮ち・肉便器エンド

カビ臭い、じめじめとした暗い牢獄の中、一人の青年が目
を覚ました。

ミディアムショートの黒髪を揺らし、ゆっくりと顔を上げる。後ろ手に鎖で拘束されており、全身傷だらけでろくに力
が入らなかった。

着ていた騎士鎧も脱がされ、着ているのはインナーとズボ
ンのみ。それすらもところどころ破れており、かつての.....
国に仕える騎士だった頃とは比べるべくもなかった。

彼の名はブラッド。とある王国の誇り高き騎士隊長であっ
た。過去形なのは今現在、王国は攻め落とされ、捕虜として
敵国に捕まっているからだ。

「っぐ.....」

最低限の手当て、あるいは回復魔法は受けたのか、傷口自
体は塞がっているものの、全身がずきずきと痛む。

だが、そんなことはどうでもよかった。自分は騎士として
の責務を果たせなかったどころか、憎い相手にこうして囚わ
れて、生かされている。いっそ死んでしまいたいとすら思
う。

破滅的なことすら考えるブラッドが、舌を嚙んで自死を試みないのは、単純に今は亡き主君が生き延びろと命じたからだ。だからこうして甘んじて捕虜という立場を受け入れ、そして.....復讐の機会を狙うと心の中で誓ったのだ。

そっと下唇を噛みしめたところで、牢屋の外から足音が聞こえた。

「ここにいるんだろ？ 噂の捕虜」

「男だけどなかなかの美人だって聞いた。あと、好きにしていってよ」

「いやー、太っ腹だね、我らが主君は」

聞こえてくるのは足音だけではなく、下卑た声も一緒だった。

なんだ、サンドバッグにでもするつもりか？ 受けて立つぞ。絶対に心は屈しない！ なんて覚悟を決め、扉を睨みつけていると、ほどなくしてぎい、と嫌な音を立てて鉄扉が開いた。

入ってきたのは三十代から五十代くらいの兵士たちで、五人ほどいる。

手には武器や袋があり、これから拷問でもされるのだろうかと思構えた。すでに王国は陥落し、聞き出す情報も何もないだろうに。

だが、彼らの顔つきの野蛮さを見る限り、ただ単にいたぶりたいだけなのだろうと冷静に考え直した。

「噂通りの顔で萎えずに済みそうだ」

一人がブラッドの前で膝をつき、顎を掴む。優しさなど皆無であり、みしみしと骨が軋み痛みを発生させた。

男たちはみんなそれぞれブラッドを見下ろし、ニタニタ笑っている。だが、殴ってはこない。なにが望みだ？ 睨み、いっそ唾でも吐きかけてやろうと口を開きかけた瞬間、一番奥にいた男が口を開いた。

「無礼な真似でもしてみろ。捕虜になったお前の部下や、占領下の国民たちがどうなるか.....想像できるよなあ？」

「っく……」

「わかってんなら大人しくしろ。お前は今から俺たち兵士の慰み者、性奴隷にされるんだからよ」

性奴隷。男の、しかも細身ではあるものの長身の男である己がそんなはけ口にされるなどとは考えていなかった。

聞くに堪えない人権などまるで無視した脅しに、ブラッドは思わず唇を引き結び、うめき声を上げる。

「は……？ そんなこと、許されると思っているのか……

！？ っが」

お前たちは国のために戦っている兵士ではないのか。誇りというものはないのか？ そんな言葉を続けようとしたところで、男の一人がブラッドのみぞおちを容赦なく蹴り上げた。

後ろ手に拘束されているせいで受け身を取ることもできず、そのまますぐ後ろにある壁に背中を強く打ち付ける。

倒れこむブラッドを見て、男たちは手を叩いてそれはそれは愉快そうに笑った。そして、それを皮切りに男たちが一斉に動き出した。

「っぐ、っうゝっけほ、やめ.....っ」

すでにぼろぼろだったインナーを引きちぎられ、ブラッドはせき込みつつ焦った声をあげる。

しかし、人質を取られている以上暴れるという選択肢は存在しなかった。

服をナイフで切られ、ぼろ布と化す。上から下までじろじろと見られる中、男の一人が一つのことを気が付き、声をあげる。

「こいつ、ちんこの代わりにまんこがついてるぜ！」

破られたズボンの合間から覗く股間には、男なら誰でも知っているはずのものが存在しなかった。代わりに、つるんとした綺麗な肌に、薄桃色の綺麗な秘唇があり、慎ましやかにぴっちりと閉じている。

身体中にある傷とのコントラストがどうしてか眩しく、よりいっそう淫らに見え、男たちはにたにた笑いながら舌なめずりをした。

「ほんとだ、これってもしかしてえ、カントボーイってやつじゃねえか？」

「ぎゃははは、騎士様がカントボーイなんてなあ！もしかして騎士ってのもあれか？イロになって入れてもらったのか？」

「ふざけるな……っ！」

がちゃんっ！我慢ならず、ブラッドはがしがしと鎖を鳴らしながら、怒りに顔を真っ赤にしつつ怒鳴り声をあげる。

しかし、鎖はびくともしないし、男たちは少しも恐れたりしない。それどころかよりいっそう嗜虐心を刺激されたのか、ぐるとブラッドを取り囲み、腕を伸ばし始めた。

「っう、やめ、っあゝ！？」

まっさきに手が伸びてきたのは当然性器—まんこだった。

まったく濡れてもいない、隙間なく閉じた割れ目を指でなぞられ、ブラッドは気色悪さに唇を噛む。

しかし、一人の手が小さな豆粒を抓り上げると、それまでとは一変してしまった。

「っあひ！？」

「おお、やっぱクリは未開発でも気持ちいいんだな」

「騎士様みたいなのは、痛みに強いからな。快感のほうが効くんだよ」

抓まれた瞬間、腰全体にびりびりと雷魔法でも受けたかのような甘く切ない痺れが走る。

普通の男と違うブラッドは、健康を保つために自慰を行う必要もなく、ひたすら国のために騎士として尽くしてきた。

こんな身体では恋人だってできたこともなく、股間のクリトリスに洗淨目的以外で触れたこともなかった。

ようするに、男の見立て通り、快楽耐性がなかった。

「あっあっあっ、なんだ、これっ♡やめろ、さわる、なっあっ！くそったれの、外道、どもがっあっ！」

生まれて初めての直接的な快感に腰をビクつかせながら、それでもブラッドは気丈にふるまう。

しかし、その声は明らかに甘ったるく、男たちをますます煽り、上機嫌にするだけだった。

「説得力ねえなあ、騎士さまは。どんどんびちゃびちゃに濡れてきてるぜ？」

「後ろ手に拘束してると仰向けに転がせねえな。どうする？魔力遮断装置が入ってるから拘束具は解けないけど」

「上から手を吊り下げるか？」

「おっけー」

ブラッドをいかに弄びやすくするかを相談し始めた男たちは、それぞれ目くばせしあい、動けないブラッドを一人を除いて全員で押さえつけ、残りの一人が拘束を取り払う。

もちろんこのままではなく、すぐに後ろ手ではなく前手で拘束する。ブラッドからしてみれば、拘束があろうとなかろうと、男たちに逆らうことはできない。なぜなら国民と、部下たちを人質にとられているからだ。

前手で拘束された後、腕を無理やりあげさせられ、天井から吊り下げられる。足がぎりぎりつく程度の高さであり、膝をつくことも叶わない。纏っていたぼろ布はすでに衣服とは言えず、ブラッドが動くたびにはらはらと埃っぽい地面に剥がれ落ちていった。

ほぼ生まれたままの姿になってしまったブラッドは、惜しげもなく美しく鍛えられた肉体を男たちの眼前にさらす。

無駄なくついた筋肉は剛というより柔であり、胸筋に触れた男は思っていたよりもずっと柔らかいことに気づき感嘆の声をあげた。

「胸でっか♡それにやわらけ～♡流石騎士、鍛えてるだけあるな♡」

それを皮切りに男たちは目を蛇のように細めつつ、胸だけでなく胸やわき腹、唇、まんこ、ブラッドの身体のありとあらゆるところを弄び始める。

「っひう、つく……ん、んうゝ……っ」

気持ちいい？ありえない。どうして。先ほどのまんこへの刺激で目覚めてしまったからか、あるいは男たちの手つきがあまりにもいやらしいからか、触れられた個所がどこもかしこも快感を発生させることに気づいてしまった。

どこもかしこも熱を帯びていて、勝手に息があがっていく。己がこれほどあさましい、快楽に弱い人間だったなんて。酷いショックを受けつつも、ブラッドは必死に声を殺す。

「声我慢しちゃってるんだ？気持ちよさそうな顔してんのに、プライドたけえなあ！」

「ふっ……つく、っうゝ……」

「ばーか、それをへし折るのが最高に楽しいんだろ？」

「んっあ、あゝ ツ……♡っあふ、っうゝ うううゝ……ツ」

男の一人がそう言って、クリトリスをぎゅうううっ♡と
取れそうなほど強く抓る。途端、ずくと重い刺激が腰全体
に響き、こらえようと必死だった声が漏れてしまう。

気持ちいい。割れ目もどんどんびしょびしょに濡れそぼ
り、食べてくれと言わんばかりに勝手に準備を整えていく。

乳首だってそうだ。ブラッドはあくまでもまんこがついて
いるだけの男で、乳首は普通の男と同じ、存在価値のないも
ののはず。だというのに、まんこを撫でられるのと同時に爪
先で先端をほじくられると、たまらなかった。

身体を揺らすたびに、頭上でがちゃがちゃとやかましい音
を立てる鎖が、より一層みじめさを加速させる。

「あー、口まんこもあったけえ、よさそうだなあ♡早くちんば突っ込めてえ〜♡」

「んえ、んぶっ……」

「囁んだらわかってるよな？舌を自分から絡めて、抱いてく
ださいっておねだりするんだよっ！」

「ぢゅ、る……ふぐ、ん、ンゝう……っ」

喉奥まで指を三本突っ込まれ、舌を引っ張られる。

息苦しさと共にぞわぞわとした悪寒にも似た快感が背筋を這い登り、ブラッドは眉根を顰めた。なんで、どうして。こんなのありえない。そう思うのに、どんどん快感が勝手に大きくなっていく。

「そろそろ指挿れてもよさそーなくらいまん汁溢れてきたな♡」

「~~~~っううゝ♡んうぐ、れろ、ぢゆるるっ.....！？♡
」

「うお、雌くっさ♡」

まんこの割れ目を撫でられるたび、くちくちと濡れた音が響く。それが止まったと思ったら、正面を陣取った男が撫でるのではなく、しゃがみこんであらうことか性器に鼻を近づけてきたのだ。

しかも、それでは終わらず、すんすんと無遠慮に匂いを嗅いだ後、割れ目に舌を差し込んでくる。

「ひっ.....！？」

くち、ぬぷぷ、ぬちゅっ♡

隙間なく閉じていたはずなのに、舌は難なくナカへと侵入を果たしてしまった。熱く滑った舌が敏感な膣の中にぬるりと入ってきて、好き勝手に暴れまわる。

割れ目をなぞられていた時だって気持ちよかったのに！これは駄目だと瞬時に理解した。

「んぢゅ、うまっ♡騎士隊長様のまんこ甘じょっぱくて最高
だなぁ♡れろ、ちゅぶぶっ♡」

「あっあっ♡やめ、っろおゝ！っあふ、くう、ンゝ
こえっ、やだ、っあふ、でちゃっあゝ！」

「騎士とは思えない雄を誘う声が出ちゃうって？負け犬
にゃあ似合いだよっ！カントつつたって上は男なのに、乳
首もこんなに硬くしちまって、騎士として情けなくねえの
か？あ？」

「んううううゝ ツ.....♡っあ、はぐ、ぢゅる、つぶあゝ
.....♡ら、出したくて、出してるんじゃっ.....何故、こん
な、っあふ♡」

くち、くちくちくちっ♡ぐにぃ、くちゅ、ぬぽっ♡ぬぽっ
♡♡♡

男たちに言葉で攻め立てられながら、口を、乳首を、まんこを弄られ、ブラッドはとうとう声を抑えられなくなってしまった。

口を指でかき回されているせいで、余計に濁ったあまあい声が漏れだしていく。

ああ、早く抱きたい。このプライドの高そうな騎士をめちゃくちゃに犯して、心をぽっきりへし折って、性奴隷として身も心も堕としたい。歪んだ欲望に男たちは高ぶりを抑えられず、それぞれ股間を腫らしていた。

「まんこはそろそろよさそうか？」

「じゅるるっ、ああ、もうとろっとろでさっきから汁がとまんねえし、ナカもぐねぐね動いてちんぽ欲しいって媚びてくるぜ」

「はーっ♡はへっ……っう、あゝ……あうゝ♡」

ようやく舌が抜けるものの、男の言う通り、とぷとぷ際限なく汁を垂らし、ナカは収縮を繰り返している。

抜けた瞬間、ブラッドを襲ったのはどうしようもない寂しさだった。腹の奥にある子宮がきゅんっ♡と疼いて、もっと刺激が欲しいと涎を垂らしてしまうのだ。

下半身は自由故に、ブラッドは無意識のうちに膝を擦り合わせ、気をそらそうとする。当然、男たちはそれを見逃さない。

「もじもじ膝すり合わせちゃって、快感が欲しくてしかたないんだろ？おい、穴が足りないからケツもほぐしとけよ」

「わかってるって。梁型持ってきたから♡」

「は、そ、そんなところ入れる場所では……っ」

ブラッドが焦った声をあげるものの、男の一人が細めの梁型を取り出し、油をたっぷり垂らす。

それから見せつけるようにブラッドの眼前までもってきて、鼻先や頬にぐいぐい押し付けてきた。ぬちゃりと粘着質な音がして、安物特有の嫌な匂いがツンと鼻腔に飛び込んでくる。

ぬるぬると滑って不快でたまらない。そもそも、尻穴を使うなんて不浄だ。

しかし、男たちの目はぎらついており、決定事項らしい。流石に全身を強張らせる。が、そんな反応を見せれば男は喜ぶだけであり。

「後ろほぐしながら処女もらおう」

「んぎっ！？いっづ、っうゝ……っあゝ……」

「いいね。で、そのままケツ穴も使って二穴か、いいねえ。人間じゃなくて家畜以下って感じで興奮する」

会話しながら、尻のあわいにディルドを擦りつける。そのたびに牢の地面とはまた違う冷たさを感じ、ブラッドは鳥肌を立てた。

しかし、それで止まるわけもなく、男はそのままなんでもないかのようにブラッドのアナルに梁型が挿入される。細身なのと滑りがあったからか、恐ろしいことにぬるんっ♡と尻穴は梁型を受け入れてしまった。

異物感と圧迫感を感じ、ブラッドは顔を歪める。しかし、梁型に気を取られていて、男たちがそれぞれちんぽを取り出したことに気づかなかった。

「んじゃ処女も〜らいっ！」

まんこを舐めて濡らした男が立ち上がり、ちんぽをまんこに擦りつけてきた。

熱く硬い肉の塊に、ブラッドは思わずうつむいて凝視してしまう。血管の浮き出た長大なちんぽは赤黒く、グロテスクとしか言いようがなかった。それから周りの男たちにも目を向ける。

大なり小なり似たような、グロテスクな肉の塊をはちきれんばかりに膨らませていた。

「この体勢だと口は使えねえなあ」

「後で調教してやりゃいいだろ。四つん這いにして前と後ろからがつつ突くのよ」

「その前に二穴貫通だろ♡」

げらげら笑いながら、男がちんぽをまんこにゆっくりとめり込ませていく。すでに愛液でとろとろにぬかるんだまんこは龟头を歓待し、痛みはほとんど感じない。

こんな特異な身体だ。誰かと恋仲に落ちるようなことはないと諦めていたが、処女をこんな奴らに奪われることはあまりにも屈辱的だ。

いっそ、激痛が走ったほうがずっとよかった。そのほうが救われる気がした。だが、現実は残酷で、感じるのは多少の圧迫感とぴりぴりとした痛み、そしてぷつりという小さな音だけだった。

「っあ、アゝ♡んあ、っあゝ、っひ、はい、って.....っえ、ん、んううゝ♡」

ずぶ、ずぶぷぷぷっ.....。

処女膜をあっけなく破った極太ちんぽはどんどん中へ中へと入っていく。Gスポットをぐりぐり竿で抉られ、ブラッドは目を見開き白い喉を晒して悲鳴のような喘ぎを漏らした。

気持ちいい。舌とは比べ物にならない質量に、ブラッドは鎖をじゃらじゃら鳴らしながら身を振って快楽を逃がそうとする。なんなら膝が早くも笑い始めていた。体幹には自信があったのに、快楽にはこんなに弱いなんて、情けなくて涙が出そうだった。

そして、ブラッドのそんなささやかな抵抗すら許すつもりはないらしい。周りの男たちがそれぞれ勝手にちんぽをわき腹や腹、腰に擦りつけながら、動けないように手でがっちりと押さえ込んでくる。

「ちゃんと見ろっ！自分の情けないさまをなあ！」

うつむく顔も無理やり頬を掴まれ、あげさせられ、目を瞑るな、声を殺すなと脅された。

逆らえばどうなるかは自明の理で、ブラッドはそのまま快感を逃がすことも、己の醜態から目をそらすこともできない。しかも、あろうことか、逃げられないと理解すればするほど、快感がなぜか大きくなっていく。

「っあひ、っう、うあゝ♡んう、うごく、なっ、あふう
ゝ、うあんゝっ……っく、うううゝッ♡♡♡」

「いい声になってきたぜ、騎士隊長様♡あー、すっげえ締め
付け、すぐ持っていかれそうだ……っ！」

ぱちゅ、ぱちゅんっ♡どちゅ、どちゅんっっ♡♡♡

男が気持ちよさそうに目を細め、本格的にピストンが開始
される。それに合わせて後ろに陣取った男が梁型をずぼずぼ
出し入れし、残りの男たちは自分のちんぽをシコりながら乳
首やわき腹にちんぽを押し付けて愛撫してくる。

全身男たちのカウパーや自らの出した体液でどろどろに汚
れていく。気持ち悪いはずなのに、際限なく身体はどんどん
熱くなる。このまま燃え尽きてしまうんじゃないかと錯覚し
てしまうくらいだった。

「あふっ♡んう、っく……っお、おほ……っ♡っは
ひゅ、っうあぎっ♡♡♡いや、っだあゝ……ッ♡」

「中うねって、もっと欲しいって媚びてくるぞ？」

「そ、んっ、なっぁ♡っはひゅっ♡♡♡んお、っおほっお
ゝ♡♡♡」

ごりごり、ごちゅ、ごちゅんっ♡

どちゅどちゅ激しく真正面から突かれ、反り返った竿がGスポを潰しつつ奥のポルチオ口まで攻めてくる。

赤ちゃん部屋の入口にでっぴり太った亀頭の先っぽがキスをした。その瞬間、脳天を快樂が直撃し、ブラッドはびく、びくんっ♡♡♡と大きく身体が震え、生まれて初めての絶頂に至ってしまった。

「あ、あえ……？♡♡♡」

視界でちかちか火花が散る。頭が真っ白になって、キモチイイという感覚以外、全てぬりつぶされてしまった。

間拔けな声をあげながら、ブラッドは目を見開きぽろりと涙を零す。生まれてからそうそう涙を流したことなどなかったのに、快樂由来の生理的な涙が勝手に流れ出てきていた。